

長野県植物誌パイロット版 II

藤田 淳一 *1・大塚 孝一 *2・星山 耕一 *3・上野 勝典 *4・上野 由貴枝 *4・松田 貴子 *5・
中村 千賀 *6・石田 祐子 *7・島野 光司 *8

1. はじめに
号でも述べた通り、現在検討中の内容や不確定な内容を含んだ未完成のものである。内容に関しては更に調査、検討結果を踏まえて推敲していく。今回は、9 名による 10 科 26 種、及びその種内分類群について紹介する。

2 パイロット版
(1) コケシノブ科 (執筆：上野勝典)

◆ ホソバコケシノブ *Hymenophyllum polyanthos* (Sw.) Sw.
北部、中部、南部に分布。常緑性。やや薄暗い湿った岩上や樹上に着生する。胞子囊群は秋ごろに展開し、2 弁性で、葉の上部から下部へ全体につく。葉身は生育環境によって数 cm から 10cm を越えるものまで変化が大きい。包膜の形も円形のものや、やや先端がとがるものもあり変化がある。

↓

近年、台湾のホソバコケシノブがヒメコケシノブを含めて 5 種に分けられた (Tian-Chuan Hsu et al. 2019)。日本のホソバコケシノブは遺伝学的な検討からヒメコケシノブの他にそのうちの 3 種があることがわかり、包膜の形状、葉柄の柄の有無、大きさなどの形態から区別できるか検討されている。長野県にはそのすべてが生育している可能性があり、長野県のサンプルについて遺伝学的検討が進められている。

◆ ヒメコケシノブ *Hymenophyllum coreanum* Nakai
北部、中部、南部に分布。常緑性。湿った岩上に着生する。ホソバコケシノブよりもやや乾燥した明るい場所を好む傾向がある。小型であるため、岩上ではうろこ状に生えているように見える。小型のホソバコケシノブに似ているが、裂片がやや広くて密な感じがする。胞子囊群は葉の先端にまとまって伸びるように付き、包膜は三角形で先端がとがる。葉柄に翼がある。

◆ ミカワコケシノブ *Hymenophyllum mikawanum* (Seriz.) Seriz.
南部に分布。常緑性。湿った岩上に着生する。ホソバコケシノブよりも水の流れに近いところに生育することが多く湿度を好む。やや小型であるため、ヒメコケシノブのように見えることがあるが、羽片が不規則に分岐してその先端に胞子囊群を付ける。包膜は三角形で先端に不規則な突起がある。葉柄の翼はない。日本固有の植物で、岐阜県、愛知県、静岡県、長野県の県境付近で報告されていたが、最近、独立配偶体で生育しているものが東京都や埼玉県で見つかったことから、より広い分布があると予想されている。

*1 藤田 淳一 長野県松本市 aegithalos-caudatus@celery.ocn.ne.jp
*2 大塚 孝一 長野県長野市
*3 星山 耕一 静岡県静岡市
*4 上野 勝典・上野 由貴枝 長野県松本市
*5 安曇野市豊科郷土博物館 〒399-8205 長野県安曇野市豊科 4289-8
*6 長野市立博物館分館戸隠地質化石博物館 〒381-4104 長野県長野市戸隠栃原 3400
*7 神奈川県立生命の星・地球博物館 〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499
*8 信州大学理学部 〒390-8621 長野県松本市旭 3-1-1

(2) シシガシラ科 (執筆: 石田祐子)

◆ シシガシラ *Blechnum niponicum* (Kunze) Makino

全県に分布。葉は常緑性で二形性があり、葉長 20~40 cm。胞子葉は 1 回羽状複生、栄養葉は 1 回羽状全裂。葉柄は淡褐色だが、若い時は赤味を帯びることがある。鱗片は線状披針形から線形で、中央部は褐色から黒褐色、辺縁は淡褐色。低山帯から亜高山帯にかけてみられる。山地の林下に生え、低山、山野に普通に見られる。

中池 (1982, 1992) はシシガシラ科を、2 形にならないヒリュウシダ属 *Blechnum* L. と 2 形になるシシガシラ属 *Struthiopteris* Scop. を別属にし、コモチシダ属とあわせ 3 属に分けているが、今回は、海老原 (2016) に従い、シシガシラ属 *Blechnum* L. を採用したい。この内容を科もしくは属の説明で書くか検討したい。

単羽状と 1 回羽状のどちらを使うかが課題。海老原 (2016) では単羽状という用語を使わず、「1 回羽状」を使用している。その他の図鑑では、「単羽状」を使用していることが多い。

◆ オサシダ *Blechnum amabile* Makino

全県に分布。常緑性で二形性。シシガシラに比べやや小さく葉長は 20~30 cm。胞子葉は 1 回羽状複生、栄養葉は 1 回羽状全裂。葉柄は淡緑色から淡褐色で、若い時は赤味を帯びることがある。鱗片は幅広く卵状披針形~広披針形で、中央部は褐色から黒褐色、辺縁は淡褐色。低山帯から亜高山帯に見られるが、シシガシラに比べるとやや少なく、より山奥の岩場等に生える。

◆ ミヤマシシガシラ *Blechnum castaneum* Makino var. *castaneum*

北部に分布。常緑性で二形成。葉長は 20~40 cm。胞子葉は 1 回羽状複生、栄養葉は 1 回羽状全裂。葉柄は褐色から紫褐色。鱗片は線状披針形で、茶褐色で中央部は褐色から黒色。低山帯上部から亜高山帯の山林に生育する。

アオジクミヤマシシガシラ *Blechnum castaneum* Makino f. *viridipes* (Honda) Tagawa

葉柄と葉軸は緑色で、赤褐色を帯びない品種。基準品種の集団中に稀に存在する。

アオジクミヤマシシガシラを品種ではなく変種(var. *viridipes* Honda)とする考えもある。どちらの学名を採用するか検討したい。

(3) サトイモ科 (執筆: テンナンショウ属: 星山耕一、ザゼンソウ属: 大塚孝一)

1) テンナンショウ属

◆ ミミガタテンナンショウ *Arisaema limbatum* Nakai et F. Maek.

中部に分布。暖地では 3 月~寒冷地では 5 月頃、花序が開き、その後葉が展開する。葉は 2 個、小葉は 7~11 枚で小葉間の葉軸はやや発達する。小葉の中脈にはしばしば白斑がある。仏炎苞は黒紫色~紫褐色で白条が目立つ。筒部口辺は耳状に大きく開出する。花序付属体は円柱状からやや棍棒状。落葉樹林の林下、林縁に生える。県内で確認されたのは軽井沢 (小澤・溝口 2006) のみである。

北相木村三滝の標本 (N2527, 2625 1986 年 6 月, 8 月) が長野県植物資料集 CD-ROM (2005) に 2 点記載されているが標本は見つかっていない。ここのテンナンショウは 2021 年現地に入ってみたが口辺が比較的広く開出するミクニテンナンショウの誤同定と思われる。また白馬村北城の標本 (1937 年 9 月) が国立科学博物館 (TNS1019758, 1019759, 1019760, 1019761) に 4 点あることになっているが、2019 年に TNS に訪問した時は確認できなかった。こちらは採集日が 9 月なので果実による同定は困難であり、誤同定と思われる。

◆ ミヤママムシグサ *Arisaema pseudoangustatum* Seriz.

深山性で南部の標高 1,000～1,700m に分布する。開花期は 5～6 月、花序は葉よりやや遅れて開く。葉は 2 個、小葉は 9～13 枚で幅が細く、側軸が長くならず、小葉が接近してつく。仏炎苞は緑色で舷部はやや半透明状の白緑色、多くの白条がある。筒部口辺は開出するが耳状にはならない。花序付属体は円柱状。よく似たホソバテンナンショウとは仏炎苞が葉より遅れて開き、筒部が少し長めで、口辺が耳状にならないなどが異なる。

県内での北限は富士見町入笠山 (HOS1197) そして赤石山脈沿いに伊那市 (HOS1386, AICH85857) 大鹿村 (AICH85844)、飯田市上村 (NAC113588)、木曽山脈南部の阿智村 (HOS1374)、平谷村 (HOS1380)、根羽村 (NAC178258)、売木村 (AICH36910) などに分布。

◆ ミクニテンナンショウ *Arisaema planilaminum* J.Murata

東部の群馬県境に分布。葉は 2 個で偽茎が長く、5～6 月に花序よりやや早く開く。小葉は 7～15 枚で葉軸が発達し、鳥足状になる。花梗柄は葉柄とほぼ同長。仏炎苞は緑色、隆起する細脈はあるが白条は目立たない。舷部はヘルメット状に膨らまず潰れた形状となる。筒部口辺はやや広く湾曲、または耳垂れ状になる。花序付属体は淡緑色で円柱状。比較的高標高の落葉樹林の林下、林縁に生える。

軽井沢町、佐久市 (NAC178261)、佐久穂町 (HOS1354, 1356)、北相木村 (HOS1357) そして飛び離れて上田市 (NAC190251, 190252) が県内の分布地。隣接する群馬県上野村や埼玉県秩父市そして山梨県山梨市、甲州市の生育状況からみると南相木村、川上村も分布する可能性は大きい。

2) ザゼンソウ属

◆ ザゼンソウ *Symplocarpus renifolius* Schott ex Tzvelev, (= *Symplocarpus foetidus* (L.) Nutt. var. *latissimus* H.Hara)

北部、中部、南部に分布。開花後に展葉し、葉身は心臟形で通常横幅より縦がやや長い。高標高地や融雪時期が遅い場所では、開花と展葉が同時期のことがある。開花期は 3 月～5 月 (高標高地では 7 月上旬)。果実は開花した同年の 6～7 月頃に熟す。仏炎苞は通常赤紫色だが、黄白色から黄緑色などをした個体があり、アオザゼンソウと呼ばれる。また、花序色は日本海側の積雪の多い地域では赤紫色の個体が多く、太平洋側に近い地域では黄色の個体が多い (Otsuka et al. 2011)。花序は発熱する。湿地や湿潤な斜面に生える。染色体数 $2n=60$ 。

◆ フイリザゼンソウ *Symplocarpus renifolius* Schott ex Tzvelev f. *variegatus* (Otsuka) Otsuka

葉が斑入りの品種。群落中にごく稀に産する。白馬村飯森。

仏炎苞の色は注目され和名がつけられてきたが、分類群としての正式記載はされていない。

今まで注目されてこなかったが、花 (花被片) の色に違いがあり、分類群として区別可能であるが、花序色の評価は今後の課題である。

◆ ヒメザゼンソウ *Symplocarpus nipponicus*

Makino

北部、中部、南部に分布。早春に周囲の植物よりいち早く展葉する。葉身は卵状心形から卵状長楕円形で細長い。葉が枯れる頃から開花が始まる。花序を複数つける個体では順次地上に小さな赤紫色の仏炎苞を出し開花する。花序は赤紫色。花期は 6 月～7 月、遅いものでは 8 月上旬ころまで。開花しているときは通常葉は枯れてなくなっている。果実は開花した翌年の 7 月頃に熟す。花序は発熱しない。染色体数 $2n=30$ 。

◆ ミドリヒメザゼンソウ *Symplocarpus nipponicus* Makino f. *viridispathus* J.Ohara

仏炎苞が黄緑色から黄白色になる品種。花序も黄緑色から黄白色となる。ごく稀にあり、自生地では集団を形成する。全国的にも稀でいくつかの自生地が知られるのみ。長野市大岡。

- ・フイリヒメザゼンソウ *Symplocarpus nipponicus* Makino f. *variegatus* T.Koyama
葉が斑入りの品種。小谷村千国。

- ◆ ナベクラザゼンソウ *Symplocarpus nabekuraensis* Otsuka et K.Inoue

北部に分布。開花と展葉がほぼ同時。葉身は腎臓形で、縦より横幅が長い。花期は5月下旬～7月上旬。果実は開花した同年の9月頃に熟す。仏炎苞は長さ4～7cmとザゼンソウに比べてごく小さい。仏炎苞は赤紫色で、ザゼンソウやヒメザゼンソウのように黄白色となるような個体は今まで知られていない。花序色も赤紫色。花序は発熱する。染色体数 $2n=60$ 。東北地方では、仏炎苞は赤紫色で花序色が黄白色となる個体がある。

仏炎苞は赤紫色であるが、やや薄くなって緑紫色となる個体が見つかった

(4)イネ科（執筆：藤田淳一）

- ◆ アキノエノコログサ *Setaria faberi* R.A.W.Herrm.

全県に分布。農耕地周辺に生育する。小穂の第二苞穎が短いため、両性小花の背面が露出するのが特徴とされるが、花序が大きく湾曲して、しだれ、花序が刺毛を含め1cmより太いのは県内では本種のみである。花期には幅があり、7～9月に渡る。従来から生育する在来系統は花期が遅く、花序の側枝が分岐せず、葉が細く緑白色で垂れるのに対し、近年急増している外来と考えられる系統は、花期が早いものと遅いものが存在し、花序の側枝が分岐し、葉が幅広く鮮緑色で斜上する。外来系統には少なくとも2系統確認され、花期が早く、花序の長さが15cm以上となる系統と、花期が遅く、花序の長さが7～8cmと在来系統とほぼ同じものが存在する。

現在のところ、在来系統と外来系統2系統の識別は容易であり、花期の早い外来系統の原産国であるアメリカ農務省(USDA)の資料では、日本のアキノエノコログサと区別をしていない。しかし、資料内の記述等から花期の早い外来系統のみを認識しているようにみえる。筆者は、花期の早い外来系統をスーパーアキノエノコログサ、花期の遅い外来系統をコスーパーアキノエノコログサと仮称しているが、この呼称を用いるのは冒険が過ぎるか。特に花期の遅い外来系統は、農耕地や河川で急増し、純群落を形成するに至っているため、何らかの形で情報発信が必要である。

(5)ケシ科（執筆：上野由貴枝）

- ◆ ヤマエンゴサク *Corydalis lineariloba* Siebold et Zucc.

北部、中部、南部に分布。明るい樹林下に生える多年草で、時として大きな群落を形成する。花は赤紫色～青紫色。苞は歯牙または欠刻がある。塊茎から1個の茎を出し、最下に鱗片葉が付く。葉の形は変化が多く、小葉が線形のもの、ササバエンゴサク、円形のもの、マルバエンゴサクと呼ばれてきた。花期：4月～5月。

- ◆ キレハヤマエンゴサク *Corydalis lineariloba* Siebold et Zucc. f. sp.

蓼科町 津金寺。

◆ オトメエンゴサク *Corydalis fukuharae* Lidén

北部、中部に分布。明るい樹林下に生える多年草。花は赤紫色～青紫色。苞は線形から披針形で全縁。塊茎から1個の茎を出し、最下に鱗片葉が付く。花期：4月～5月。

Lidén (1996)によるキケマン属の再検討によると、従来エゾエンゴサクに対してあてられていた *Corydalis ambigua* Cham. et Schltdl. に該当する植物は、日本列島に分布しないという。日本列島には北海道と本州にエゾエンゴサク *Corydalis fumariifolia* Maxim. subsp. *azurea* Lidén et Zetterlund 及びオトメエンゴサク *Corydalis fukuharae* Lidén の2分類群分布するが、まだ不明な点が多く、検討が必要とされている。

◆ ジロボウエンゴサク *Corydalis decumbens* (Thunb.) Pers.

中部、南部に分布。明るい樹林下に生える多年草。花は赤紫色、距が白い個体もある。苞は卵型で全縁。塊茎から数個の茎と根生葉を出す。茎基部の鱗片葉は無い。花期：4月～5月。

一時長野県では絶滅とされたが、2005年松本市で見つかったのちに県中部において次々に確認されている。しかし、どの自生地においても造成されたと思われるかく乱環境であることから、外部から持ち込まれている可能性を否定できない。

(6)マメ科（執筆：中村千賀）

◆ メドハギ *Lespedeza cuneata* (Dum.Cours.) G.Don var. *cuneata* (= *Lespedeza juncea* (L.f.) Pers. var. *subsessilis* Miq.)

全県に分布。高さ1mに達する多年草。茎は立ち上がりよく枝分かれする。葉は茎に沿って密につく。花は葉脇に集まってつくが、淡黄色で旗弁に紅紫色の斑点がある開放花と、閉鎖花がある。閉鎖花の萼裂片に1脈があり、萼裂片は豆果より短い。豆果の表面にはごく疎らに毛がはえる。

● キバナメドハギ *Lespedeza cuneata* (Dum.Cours.) G.Don var. *cuneata* f. *flava* Hayashi

黄花品種。松本市五常。

● シロバナメドハギ *Lespedeza cuneata* (Dum.Cours.) G.Don f. *leucantha* Sugim.

白花品種。松本市四賀会田。

● ムラサキメドハギ *Lespedeza juncea* (L.f.) Pers. var. *purpureata*

紫花品種。大町市山崎。

● ハイメドハギ *Lespedeza cuneata* (Dum.Cours.) G.Don var. *serpens* (Nakai) Ohwi ex Shimabuku

北部・中部・南部に分布。茎が基部から倒伏して地を這う変種。基本種よりも葉は幅広く、花は紫色の部分が多い傾向にある。

学名は長野県植物目録（2017）に準拠した。細かい品種など Ylist に掲載されていない学名の確認作業を改めてするのかどうか。各品種の発見地を書くのか。

- ◆ シベリアメドハギ (アオメドハギ、イヌメドハギ、カラメドハギ) *Lespedeza juncea* (L.f.) Pers.

メドハギに似るが、茎が紫褐色を帯び、葉は網目状の葉脈が目立つ。また閉鎖花の萼裂片に明瞭な3脈があり、豆果の表面の毛が長いことで区別できる。長野県植物誌(1997)ではカラメドハギの和名を用いていたが、本来のカラメドハギは *Lespedeza inschanica* (Maxim.) Schindl. である。県外では造成地などで中国由来と推定される株、またメドハギとの推定雑種も確認されている。

県内での中国由来株や雑種の生育・特徴について要確認。

- ◆ 【雑種】 ツルメドハギ *Lespedeza* × *intermixta* Makino

メドハギとネコハギとの推定雑種。千曲市赤田。

長野県植物誌 1997 ではハイメドハギとネコハギとの雑種に対して、ミカドメドハギ、ネコメドハギの和名が記載されているが、これらもツルメドハギの異名として挙げるか。

(7) ブナ科 (執筆: 島野光司)

- ◆ ブナ *Fagus crenata* Blume

全県に生育。山地に生育する落葉広葉樹。樹高 20m 以上の高木になる。山地帯・冷温帯、すなわち関東、中部地方では、標高が 700-1500m 程度のブナ帯と呼ばれる植生帯を代表する樹種である。葉は互生し、主脈より葉縁に達する側脈を持つ。かまぼこ状の緩やかな、低い鋸歯を持ち、種小名の *crenata* はこれによる。ブナ科コナラ節のミズナラやコナラは、脈が鋸歯の先端に達するが、ブナ属のブナ、イヌブナは、逆に鋸歯両端の低い部分に脈が達する。側脈数は 7-11 本ほど。地上子葉を展開し、その後の最初の本葉だけ対生する。雪の多い日本海気候下では純林を作るが雪の少ない太平洋気候下では、ウラジロモミやオオイタヤメイゲツカエデなど、多くの高木種と混じって生育する。多雪地帯のブナの葉は全長 10cm 以上と大きなものが多いが、寡雪地帯のものは 5cm 程度と小さいものが多い。こうした葉の大小を持つものに対し、オオバブナ、コハブナの名を与えることも行われてきた。イヌブナと異なり萌芽することは基本的にない。

- ◆ イヌブナ *Fagus japonica* Maxim.

中部、東部、南部に生育する。山地に生育する落葉広葉樹。樹高 20m 以上の高木になる。葉は互生し、主脈より葉縁に達する側脈を持つ。側脈数は 10-14 本とブナよりも多い。ブナが多雪地帯で優勢なのに対しイヌブナは寡雪地帯に分布し、多雪地で見るとはほぼないといって良い。樹幹に損傷などを受けても自然に萌芽を出し、これにより個体維持をしていると考えられる。野外で自生しているブナとイヌブナを樹形で見分ける際、この、萌芽を持っているかどうかは大きな目安となる。

長野県植物誌には県北部の小谷村における標本記録が引用されている (SHIN120170)。しかし、分布域から疑義が残る。形態変異の大きなブナの一型をイヌブナと誤同定されている可能性があり、再検討が必要である。

- ◆ ミズナラ *Quercus crispula* Blume var. *crispula*

全県に生育。山地帯・冷温帯に生育する、落葉広葉高木。樹高は 20m に達する。ブナとともに、植生帯で言うブナ帯、すなわち関東や中部地方では標高で 700-1,500m 程度の地域をブナとともに代表する樹種の一つ。別名でオオナラと呼ばれるのは、コナラに対して葉が大きいことによる。葉の大小を除けば倒卵形で鋸歯を持つコナラとミズナラはよく似るがコナラが明瞭な葉柄を持つのに対し、ミズナラの葉柄は極めて短く、しばしば、葉柄があるのはコナラ、無いのがミズナラ、などと表現され、重要な区別点となる。

(8) ムクロジ科 (執筆: 松田貴子)

◆ オオモミジ *Acer amoenum* Carrière var. *amoenum*

全県に分布。主に太平洋側に分布する。樹高 15m に及ぶ落葉小高木または高木。雄性同株。葉の縁は(5~)7(~9)中裂し、細かく揃った鋸歯がある。分翼は長さ 2.5cm。葉が深く裂け、裂片が狭く基部が細くなるものをフカギレオオモミジ f. *palmatipartitum* (Koidz.) K.Ogata、葉が中裂し、裂片の中央部が膨らむものをヒロハオオモミジ f. *latilobum* Ohwi という。日本固有。

分けない図鑑もみられる。要検討。

◆ ヤマモミジ *Acer amoenum* Carrière var. *matsumurae* (Koidz.) K.Ogata

全県に分布。主に日本海側に分布する。葉の縁は(7~)9 中裂し、変種オオモミジと比較すると、粗い欠刻状の重鋸歯が目立つ。

オオモミジ、ヤマモミジともに、全県分布とされる。両変種および中間型と合わせて県内分布を改めて確認する必要がある。

現在オオモミジとヤマモミジは変種関係にあるとされる。県内にはこの中間型が多数存在しており、区別が困難な個体も多い。岐阜県植物誌の調査から同様の報告あり(高橋 2021)。今後、調査によって県内の傾向がみえてくればと考える。

◆ ヒナウチワカエデ *Acer tenuifolium* (Koidz.) Koidz.

中部・東部・南部に分布。樹高 8m ほどになる落葉小高木。雄性同株。葉は 9~11 中・深裂し、縁に欠刻状の重鋸歯がある。分翼は長さ 1.5~2cm、翼果は鈍角に開く。ヤマモミジの 9 裂のものと紛らわしいが、ヒナウチワカエデの葉は裂片の基部に隙間ができることが多く、裂片の先はふつう短く尖り、尾状に伸びない傾向がある。またヤマモミジは裂片が直線的に先まで伸びるのに対して、ヒナウチワカエデは裂片の先端がやや内側に曲がる。全体的にヒナウチワカエデの葉のほうがやや小さく繊細な印象をもつ。日本固有。

原記載に記述あり。

原記載に 9~11 裂と明記されているが、長野県植物誌(1997)では 7~9 裂となっている。このことを含めヤマモミジとの相違点を念頭に、改めて標本を再確認する必要がある。

(9) アゼナ科 (執筆: 藤田淳一)

◆ タケトアゼナ *Lindernia dubia* (L.) Pennell subsp. *dubia*

全県に分布。水田や河川の氾濫原等に生育する北アメリカ原産の一年生草本。アゼナ *Lindernia procumbens* (Krock.) Philcox に似て花柄が茎葉と同長、若しくは茎葉より長い、茎葉葉縁に不明瞭な鋸歯が数対あり、全草淡紅色を帯びた黄緑色となる点異なる。県内の現行田でみられる *Lindernia* は、大半が本種である。一部の個体は、アゼナとの中間的な形態をしたものが散見され、雑種形成の可能性もある。

雑種と考えられる証拠標本を残す必要がある。さらに筆者が雑種と認識しているものの一部にはヒメアメリカアゼナ *L. anagallidea* (Michx.) Pennell を含む可能性があり、さらなる詳細形態の確認や過去標本の検証が必要である。

◆ アゼナ *Lindernia procumbens* (Krock.) Philcox

全県に分布。土地改良等が実施されていない古い水田や休耕田、河川の氾濫原等に生育する一年生草本。タケトアゼナ *Lindernia dubia* (L.) Pennell subsp. *dubia* に似て花柄が茎葉と同長、若しくは茎葉より長い、茎葉葉縁には鋸歯がなく、葉面には3本程度の脈がはっきりと視認でき、葉面は深緑色からオリーブ色となり、全草、紅葉時以外には赤みは帯びない。普通種として認識されているが、近年ほとんどみられず、アゼナとして認識されているものの大半がタケトアゼナである。タケトアゼナとの中間的な形態をしたものが散見され、雑種形成の可能性

実は絶滅危惧種と考えている。この現状を過去の標本精査と近年収集されつつある標本データをあわせて検証し、ここにその情報を一文入れたい。

3. おわりに

今回、執筆対象となる種のごく一部であっても、学名や種内変異をどの分類学者の見解に従うのかという、リストアップの段階で、すでに難題を含んでいることが散見される。図鑑や植物誌を利用する立場からすると、分布や識別の難しい分類群の形態的特徴に注目しがちである。いざ執筆するとなると、普通種や識別の容易な分類群でさえ、どういう認識に基づき、どのような見解をとるのかというスタンスを明確するための資料の通読が求められることに気づく。今後もパイロット版の執筆を進めながら、広く意見や見解を集め続けたい。本稿の内容について、ご意見、情報等あれば、お寄せ頂きたい。

参考文献

- 海老原 淳 (2016) 日本産シダ植物標準図鑑 I. 475pp. 学研, 東京
- 海老原 淳 (2017) 日本産シダ植物標準図鑑 II. 507pp. 学研, 東京
- Hsu T.-C., Huang Y.-F. and Chao Y.-S. (2019) Systematics of *Hymenophyllum* subgenus *Mecodium* (Hymenophyllaceae) in Taiwan, 44(4): 753-767
- Koidzumi G. (1916) Decades Plantarum Novarum vel minus Cognitarum. The Botanical Magazine, 30: 227-228.
- Murata J. (1978) A new species of *Arisaema* (Araceae) from Honshu, Japan. 植物研究雑誌, 53: 353-357
- 中池敏之 (1982) 新日本植物誌 シダ編. 4+808pp. 至文堂, 東京
- 中池敏之 (1992) 新日本植物誌 シダ編 改訂増補版. 7+868pp. 至文堂, 東京
- Otsuka K., Suyama C. and Ueda K. (2011) Geographical variations in spadix color of *Symplocarpus renifolius* (Araceae) in Honshu, Japan. Journal of Japanese Botany, 86: 156-161
- 大塚孝一・星山耕一・藤田淳一・尾関雅章・石田祐子 (2017) 長野県植物目録. 長野県植物目録編纂委員会
- 小澤正幸・溝口智秋 (2006) 軽井沢・碓氷峠におけるマムシグサ類の観察記録・長野県植物研究会誌, 39: 1-4
- 芹沢俊介 (2014) 日本産マムシグサの分類 (1) ミヤママムシグサ. シデコブシ 2(2): 99-109
- 清水矩宏・森田弘彦・広田伸七 (2001) 日本帰化植物写真図鑑. 全国農村教育協会
- 清水建美 監修 (1997) 長野県植物誌. 信濃毎日新聞社
- 高橋 弘 (2021) 岐阜県植物誌作成の過程で浮かんだ幾つかの分類学的問題点. 植物地理・分類研究, 69: 129-147
- USDA United States Department of Agriculture Natural Resource Conservation Service (<https://adminplants.sc.egov.usda.gov/java/profile?symbol=SEFA>) (2022 年 1 月閲覧)
- 米倉浩司・梶田 忠 (2003-) 「BC Plants 和名一学名インデックス」(Ylist, <http://ylist.info>), (2022 年 1 月 20 日閲覧)